

5グループに増えたATAC

財団法人 大阪科学技術センター
ATAC副会長 荒川 守 正

大阪のATACが誕生して来年で満15年になりますが、その後奈良、岡山、和歌山と広がり、今年広島が開業して、5グループになりました。去る4月3、4日には岡山の幹事役で、第3回の情報交換会を催し、有志27名がサンロード吉備路に集い、情報交換と親睦を深め、お互いの活力を一段と高める事が出来ました。

それでは、新しい順に各グループを簡単にご紹介しましょう。

ATACひろしま

2004年10月に発足し、2005年3月17日に広島ワシントンホテルで開催された設立記念講演会で本格活動に入りました。

(財)中国産業活性化センターの支援下12名でスタート。広島はATACの二代目会長水野博之氏のご出身地ということもあって、早くから大阪のATACの情報を収集して来られたので、やっと出来たなという思いですが、仲間が増えてお目出度い限りです。

ATAC・MATE和歌山

一年間の準備期間を経て、2002年6月に、住友金属工業のOBを中心に6名で発足し、現在12名でNPO法人。2003年コーディネーター活動支援事業に採択され、2004年STOP地球温暖化調査研究事業を受託、また無料相談会を開催し、8社から相談を受けています。創立時より、環境問題に重点をおいて活躍中。

ATAC・MATE岡山

2000年7月岡山商工会議所の中小企業振興事業の一環として創立。企業の技術系管理者、大学教官、弁理士、技術士、中小企業

診断士等9名で運営しています。現在までに18社を支援。契約件数44件。2001、2年はコーディネーター活動支援事業に採択され、2003、4年は日本商工会議所の企業OB人材マッチングモデル事業の委託金指定を受けて活動中。

ATAC・MATE奈良

1997年1月奈良在住者3名と筆者の4名で発足。2001年奈良県下第一号のNPO法人となり現在10名。山林の多い奈良では、企業よりも自治体、商工会議所、中央会等の活動に協力。独自テーマとして、サクランボと農業法人、桑と養蚕の福祉産業化、金魚の水槽飼育とインターネット販売等一次産業の近代化に注力しています。

ATAC

1991年4月に、前年の(財)大阪科学技術センター30周年記念事業の一環として発足。最近、ユニークな中小企業を20名程度の社長さんと訪問見学する勉強会(社長懇話会)を企画し、好評です。来年15周年で、今までの経験を纏めた出版物を計画中。現在の22名に新たに女性メンバーを5人程度加えて、より活性化を図れないかと思案中。また、受け身でなく、例えば、亜臨界水で環境問題を解決しようと、地元はもとより北海道、四国で提案中です。ATACの出発点になった「ATA設立の夢」近畿化学工業界1990年4月号にもあるように、先ずメンバーが互いに知り合い、互いのネットワークを利用して仕事先を見つけるなり、新たな仕事を創造するという積極性を常に忘れないことが、ATAC活動の原点であると思っています。

荒波の中で更なる発展を目指して

株式会社デジタル 工場見学と清水社長の積極経営談話、活発な質疑応答

第6回 ATAC 社長懇話会

◆工場見学

第6回ATAC社長懇話会は快晴の平成17年4月15日(金)13時40分から和泉市の株式会社デジタル和泉事業所の工場見学で始まりました。当工場はあらゆる工場の制御や管理に利用する表示器や産業用コンピューターを生産する工場で1998年に建設された新鋭工場です。



▲執行役員生産本部長・金澤研一氏による工場説明風景

執行役員生産本部長 金澤研一氏の工場概要の説明のあと、早速工場見学に入りましたが、人手によるセル生産方式とロボットによる無人のセル生産方式を併用し、部品は一部自動倉庫で保管し、部品供給は2名の水すましと称する係員が6~7千種類もある部品を必要部署に供給していました。当社の社員は全員年俸制で、賞与を含めて年一回の査定で決めています。

◆株式会社デジタル 清水社長講演要約

会場をホテルリーガロイヤル堺に移して、清水正社長のご講演を聞いたあと、活発な質疑応答を行いました。

【会社設立当時】

1972年、当時勤めていたオリベッティー社を退職して4名でデジタルを設立しました。当時マイクロコンピューターがイ



▲清水正社長の講演

ンテルから発売され、それを使って工場の監視システムを作ったり、電機メーカーの下請けをしていましたが、その後工場設備の稼働状況をモニターするコンピューターシステムを作り、各業界にデジタルブランドで納入し今日の基礎を築きました。

【発展過程】

1988年、大阪の南港に本社を作り、1997年株式の店頭公開を行い資金ができたので、1998年此処に和泉工場を建設しました。その後、世界戦略を展開しカナダ・台湾・シカゴ等に進出し、2001年には中国無錫に生産工場を建設しました。2002年12月

にはフランスのシュナイダー社と友好的TOBで、業務提携し今日に至っています。

◆質疑応答

清水社長のお話に対して活発な質疑応答が行われましたが、その要約は次の通りです。

Q: 経常利益10%の高収益の理由は何ですか。

A: 今年はもっと伸びると思いましたが、1988年ごろは5%程度であったが、利益率が上がってきたのは、オリジナル商品をつくって、生産数が増えたからで、先ほど通算100万台達成したと言いましたが、今年だけで20万台生産し、1機種で年間1~1.5万台作るので、量産効果でコストが下がって利益率が向上しました。開発費は今年で売上の10%を投入して、利益を出すために、売れる商品を開発しています。

Q: 特許はシェア拡大に役立っていますか。

A: 特許には防御する特許と、攻める特許がありますが、今は防御する特許で商品に機能を付けて他社が真似できないようにしています。これが、日本で40%以上のシェアをキープする役割を果たしています。

昔のシステムはプラスチック板に絵を描いていたが、それをテレビでやろうとしましたが、ビル制御システムではソフトが1フロアに対して60~70万円かかるので、プログラムなしで画面を書くシステムを作ったのです。プログラムレス方式が売上を伸ばした理由です。

Q: フランス社と100%M&Aによる業務提携の目的は？

A: われわれの装置は単体では動きません。PLCというシーケンサーとセットで販売するのです。われわれは表示器しか作っていませんが、オムロンなどは両方つくっているのです。将来を考えた時に生き残っていけるのかというのが、提携の理由です。他社からも働きかけがありましたが、提携条件の面で経営も組織も変わらず販売体制も変わらない条件ならば、シュナイダーの製品を売ってあげようという形で友好的TOBに応じたのです。今のところ、両社とも良かったと思っていますが、現在売上高の数字はシュナイダーの効果はほとんどありません。これからは徐々に効果が出るはずで

◆懇親会

盛り上がったところで次の懇親会に移り、清水社長を中心に各テーブルで話が盛り上がり、定刻19時過ぎに印象深い第6回社長懇話会の余韻を残して解散しました。(田頭・野町)



▲懇親会風景

第7回 社長懇話会は今秋開催の予定です。工場見学、社長講演、懇親会と大変、有意義な集まりです。参加を希望される社長又は経営者の方は4頁の第7回社長懇話会ご案内書申込み欄に必要事項を記入してFAXしてください。

読者の皆様との交流頁

この頁を読者の皆様とATACとの相互交流に使っています。

読者の 一言

「爪先だけ」の先取り (MATE研で教わったこと)

弊社は80年間歯ブラシを製造しています。私は学校では西洋史学科に属し「アレクサンダー大王」を研究し、経営や経済に関しては全くの素人です。その私が社長業を始めて14年、何とか経営者として今日までやってこれたのは、OSTEC主宰の異業種交流研究会「市場と技術開発研究会」(通称MATE研)に30年に亘り参加させて戴いているお陰であると思っています。

MATE研に入会させて戴いて最初にメンバーの方々から質問されたのが「お前の会社は何故歯ブラシだけを製造し続けて50年も生きてこれたのか」と言うことでしたが恥ずかしいことに私はこの質問に明確には答えられませんでした。「解らないのなら会社の歴史を話してみなさい」と言われて、創業者の祖父から聞かされていた歴史を話しましたところ「お前の会社の特徴は、同業他社よりも少しずつ技術の先取りをしていることやな」と言われました。このようにして弊社の特徴を明確にして戴いたのですが、これは反面「お前の会社はこの特色を失えば存続は危ういよ」と言われたのと同じであると考えました。しかし同業他社の一歩先を行った場合、一歩先の凹凸は大企業なら骨折で済むでしょうが弊社のような零細企業にとっては命取りの大怪我、半歩先の凹凸

でも大企業なら軽い捻挫、弊社にとっては快復不能の大骨折になりかねません。そこで「爪先だけ」先を行く技術の先取りをモットーにしました、「爪先だけ」なら危険を感じた時には素早く足を引っ込めることが出来、弊社でも軽い捻挫程度の怪我で済むと考えたからです。



お陰様で今年8月には大阪本社工場、播磨工場を統合し新本社工場を建設移転し一層の飛躍を計れることとなりました。これも私が生まれてこのかた関係を持って戴いた方々、とりわけ経営については弊社の生き方について貴重な示唆を戴いたMATE研のお陰と感謝しております。今後も「爪先だけ」の先取りをモットーに歯ブラシを通じて皆様の健康に貢献し、社会に貢献出来る企業を目指しています。

最後に、皆様是非MATE研にご参加下さい。

(太陽刷子株式会社 社長 小倉義生)

企業

PR コラム

貴金属合金超薄箔および超微粉の簡易的製造

株式会社吉井商店 取締役社長 吉井 成一

弊社は1919年に創業し、以来一貫して伝統的な工芸品に使われる貴金属箔粉の製造販売業を営んできました。

近年生活習慣の変化などの理由で、従来の工芸品等の用途が少なくなり市場が縮小している状況があり、新たな商品開発をせまられています。

商品開発にはいろいろな目の付け所があると思いますが、弊社では新しい技術を市場のニーズに見合うような形で適用し、簡単にまねされないものを作ることを重要な着眼点のひとつと考えており、こういった部分でATACの皆様との多大なる御協力をいただいております。

堀場製作所の堀場社長は、伝統や蓄積に根ざした技術を、“8合目からの技術”と呼んで、ICの技術の元とな



った京染の技術などを上げていますが、弊社もこのような考え方で今後とも技術開発を進めていきたいと考えています。

現在の弊社のPRポイントとしては

1. 貴金属粉についてさまざまな粒度形状のものについて小ロットから対応できる
2. 貴金属のナノメタルペーストを開発中
3. 貴金属のケミカルミーリングを事業として手がける、おそらく世界でただひとつの会社である 等です。

何かご用命がありましたら是非お問い合わせください。

株式会社吉井商店

〒920-0902 金沢市尾張町1-10-30

TEL:076-221-1678、FAX:076-221-2179



ATACホームページもご覧下さい

ATACニュース第11号に関するご意見、および今後のご要望をどしどしATAC事務局までご連絡ください。

担当/三原・梅村

ATAC事務局

〒550-0004 大阪市西区靱本町1-8-4

(財)大阪科学技術センター 技術・情報振興部

TEL06-6443-5323 FAX06-6443-5319

e-mail: atac@ostec.or.jp

URL <http://www.atac.ne.jp>

ATACの内容

本会は長年の経験により独自の技術とノウハウを有する技術者・管理者を結集し、お互いの知恵を出しあい、学習しあい、ネットワークを活用するとともに、中堅・中小企業が抱える国際化、技術開発、人材育成等の諸問題の解決を支援することにより中堅・中小企業の発展に資することを目的とする。
～ATAC規約第2条より～

ATACは上記の目的に則り、これまで14年にわたり中堅・中小企業の発展のために数々の活動を推進してきました。その主なものを挙げますと

1. コンサルティング

ATAC活動の大部分を占める業務で中堅・中小企業の抱えるさまざまなテーマについて450件以上のコンサルティング業務に携わってきました。

2. セミナー開催・講師派遣

ATACは従業員教育、経営管理、ISO関連、品質管理などのセミナーを企画・実施し好評を博しています。また、講演会・研修会などへの講師派遣も行っています。

3. 書籍刊行

中堅・中小企業の発展に役立つため、これまでに刊行した書籍は下記の通りです。

▶ ATACの経営便利帳

▶ 現場の課題解決はこうする

(中堅・中小企業の業務改善事例)

▶ 中堅・中小企業へのATAC提言集

- ①新商品開発のヒント
- ②ISO9000認証取得の手引き
- ③ISO14001認証取得の手引き
- ④中小企業のためのIT
- ⑤材料選択の手引き
- ⑥設計を考える

4. NASCA(産学連携のお手伝い)

企業の技術ニーズをお預かりして、最適な技術シーズを持つ大学や研究機関などを探し、ご紹介する業務です。

5. 公的支援情報送信サービス

ご希望の企業に、国や府県等による研究開発補助金等の公的支援募集情報をタイムリーに分かりやすくe-mailやFAXで無料配信する業務です。

新たに公的支援情報送信サービスをご希望の企業の方は下記の申込書にご記入の上、FAX (06-6443-5319)でお申し込みください。

第7回社長懇話会ご案内送付申込書・公的支援情報送信サービス(両方若しくは、どちらかに✓してください)

<input type="checkbox"/> 第7回社長懇話会ご案内送付申込書		<input type="checkbox"/> 公的支援情報送信サービス新規申込書	
企業名		担当者	
所在地			
TEL		FAX	
E-mail			
社長懇話会情報・公的支援情報送信先(どちらかに✓してください)			
<input type="checkbox"/> FAX		/	<input type="checkbox"/> E-mail

OSAKA・散歩道 大阪に橋はいくつ?

大阪に橋はいくつあるのでしょうか。ある本によると八百八橋に近い800の橋があると書いてありますし、別の本では400程度しかないと書いてあります。最近の新聞には大阪市が管理する橋は700程度だとの記事がありました。「一体どれが本当やねん」「大阪の定義が違ふんやろか」こんな疑問を持ちました。そこで頭に浮かんだのがATACの現場、現物主義です。現場へ足を運んで現物で確認しようと言うATAC魂に動かされたわけです。「せや、自分の足で調べてみたらええねん」そんなことで始めたのが大阪橋めぐりです。大阪の定義は大阪市内、橋は川に架かっている橋。この前提で北は神崎川から南は大和川まで大阪市内の川に沿って歩くこと20回。最初のうちは東横堀川、道頓堀川、木津川、大川、堂島川、土佐堀川、淀川など大きな川や有名な橋が架かっている川を歩いたので、同行者もいました。平野川、今川、駒川などの地味な川になると、とうとう一人で歩くことになってしまいました。それでもやっとすべての橋を渡り終えました。さていくつあったでしょう。答えは最後までのお楽しみとさせていただきます。

大阪市内には今でも8箇所まで渡し舟が運行されています。渡しは橋の代わりでしょうか。いいえ、渡しは道路なんです。昔から渡しがあった千本松に千本松大橋と言う橋が昭和48年に架けられました。しかし、今でも渡しは残っています。それは、人が渡るには橋はとても高いところに架けられているため、自転車や人は渡しが無ければ不便でしかたがないのです。今では自動車中心の考え方が時代の流れなのでしょう。

「大阪には沢山の橋があると言いつつ、『はし』はあっても『はし』は無い」とよく言われます。現物を見ると、かなの名札に「はし」と書いてある橋が結構あります。初めは昔の表記に濁点が無いのが普通なので「はし」と書いて「はし」と読んでいるのだと思っていました。ところが肥後橋は今の名札は「ひごはし」(写真1)と書いてありますが、横に残してある昭和初期の名札には「ひごはし」(写真2)と書いてあります。「ご」と濁りがあるのに「は」と濁りはありません。昔から「はし」はあったのではないのでしょうか。これも現物を見るまでは「はし」はあっても「はし」は無いと言う説を信じきっていました。

お待ちせしました。大阪市内にある川に架かる橋は、私設の橋を含めて566でした。大阪市が管理する橋には、高架道路の桁と桁の間も一つの橋として管理しているそうです。そのため数がまちまちだったのです。

現場へ行き、現物を見るのが一番確実です。そんな現場、現物主義を実践する集団「ATAC」を今後ともご贖賜りますようお願い申し上げます。戯言の終了とさせていただきます。(加瀬)



写真1



写真2